

協賛の奉納演奏会が開催された。献奏開始に先立ち一同国宝の本殿に参拝、修政、玉串奏尊の後、慢幕を打廻らせた能楽殿で金屏風を背に三十五度の酷暑を克服して九時四十五分迄左記の通り男女薩筑色とりどりの多彩な熱演献奏が続いたが広大な神域は数百の提灯で昼を欺くばかり、新聞報道などで此の催しを知った多数の来聴者は能楽殿前にしつらえた数十の梵に溢れるばかりに腰打ちかけて終演迄古典琵琶のメロデーに酔い、浴衣がけで通りすがりの人々もスピーカーから流れる優雅なリズムに暫し歩をとめて耳を傾けた。終演後一同迎賓館に於て今日の献奏が滞りなく終わったのを祝って乾盃した。

因みにこの奉納会は昭和三十年に始つて毎年この日に京都琵琶協会の協賛で開催されている恒例行事である。(昨年に限り休止)

秋風故郷の山―森田長三郎 敦盛―小林旭 光 吉野落(F)―古谷寛水 那須与市―矢吹華水 新撰組―植村真水 粟津の露―中島旭穂 白虎隊―木下皇水 本能寺―梅原旭壽 桶狭間―木村維水 彰義隊―平井春嶺 元寇―伊吹正陽(敬称略)

☆：京都琵琶協会九月定例茶話会 九月七日 京都市南区吉祥院中島町三〇の八九

☆：日本琵琶振興会九月例会 九月二十八日 (日)午後一時東京新宿駅前尾津才二ビル

☆：京都三美会演奏大会 十月五日(日)昼夜、京都四条界町山一証券ホール

☆：筑前琵琶旭会全国大会 十月十一、十二 両日(日)昼、神戸海員会館

☆：山崎旭会全国大会 十月十二日(日)昼夜、東京才一証券ホール

☆：錦心流一水会全国大会 十月二十五日(日)昼夜、東京上野美術協会ホール

☆：京都琵琶協会秋季演奏会 十月二十六日 (日)昼、京都安井金比羅宮会館

前号中見舞広告中「名古屋薩摩琵琶協会」訂正

告知

暑かった夏もようやく終りに近づき本号がお手許に届く頃には大分涼ぎよい気候となつていよう。京では七月十六日の祇園祭から八月十六日如意ヶ嶽をはじめ五山の送り火「大文字」ころまでが毎年最も暑いと云われている。やがて中秋の名月ともなれば庭の千草にすだく虫の音とともに暫く怠つていた琵琶への意慾も沸き撥を握つてみようという気も湧いて来る。既に薩筑各派の恒例全国大会も発表されているが今月から来月頃にかけて各地で盛んな演奏会も沢山計画されているように誠に喜ばしい次方である。何しろ夏中沈黙を守つていた事としてその反動で爽秋と共に蓄積された熱が一時に爆発するのは当然のこと。いや大いに結構、三百度の高熱をあげて十二分に歌いきり弾きまくるうではありませんか。

きとあ

昭和四十四年九月一日発行(非売品)
編集者 植村真水
発行所 京絃社
〒603 京都市北区衣笠西馬場町二九
和田才一ビル 二〇一―号
電話(462)八三二六 (461)二八七六番
内線 二〇一―番

琵琶 機関紙

京

絃

才一八三号

京絃社

薩摩琵琶界展望

長 浜 南 城 (遺稿)

鹿兒島の出身、文部大臣森有礼は、薩摩琵琶を小学校の精神教育の正科として採用した。目的で、当時の実力者を東京に集めて指導者の育成を企画したが、中道にして実現が出来ずに終わった。その頃、田中治右衛門、須田綱義両翁が、明治天皇の御前に「小教盛」の名曲を演奏したのは有名な話である。

日清、日露の戦争前後の国民の性情にアツピールして、薩摩琵琶界には有力な名家が輩出し、東京には児玉天南、西幸吉、水上武次郎、平豊彦、肥後錦獅氏等の門を叩く人々が群をなし、飯牟礼寿長、須田龍翁、能勢雅晴、池田吉時、吉村岳城、永江鶴嶺、林鶴殿、赤崎官、浜田晃養、貴島桃源、西田長祐、永井重輝、大田良一、東郷重厚、伊集院鶴城、木佐貫南壽、足立芦光、四元義一、藤井義次、中山正良、小田原国尊、鬼塚松寿、深栖天寿、西郷天風等々が名声を馳せて門弟の育成に努めた。大正の末期に至つて新界の天才と呼ばれた池田潔、副島三郎の青年天才演奏家が相

次いで病死された事は、新界の一大損失であった。

昭和の現在は薩摩琵琶正絃会(東京)、同四明会(大阪)、同同好会(鹿兒島)が正統の絃声を保っているが、永い伝統と深い歌調と、格調高い余韻は仲々捨て難く、特に本場鹿兒島の同好会は脇岡武二翁を中心に、池田天舟、萩原秋彦氏等何れも文化財の長老で、加納南龍、安田幸吉、山本海門、山下猛、肥後節、小畑鶴峰氏等多士才々の名家が活躍していることは誠に心強い。東京の正絃会も辻靖剛氏を中心に、吉成登城、関口龍城、軽部岳瑞、普門義則等結束して、毎月一回才三日曜を例会日に定め、大阪四明会も栗本天芳氏等の中軸として毎月例会を開催している。

琵琶といわず邦楽一般がテレビやラジオにもっと取上げられ、その企画やプロが邦楽中心に改組されても良いと思われる。淡々たる歌風と余韻の中に、格調高い古淡な伝統を結集堅持したいものである。(完)

「平家物語」の物語(二八)

壇浦合戦

さる程に、源平両陣を合はす。陣のあはひ海の面、僅かに三十余町をぞ隔てたる。門司、赤間、壇浦は海(みなぎ)り落つる潮なれば、源氏の舟は心ならず、潮に向いて押し落さる。平家の舟は潮に追うてぞ出で来たる。

壇の浦合戦は源平最後の戦であると同時に、はじめての正面切つての海戦だった。これは必然のことで、義経も平家の息の音を止めるには舟いくさを覚悟していたし、平家にとっても望むところであった。平家の事実上の指揮は屋島から逃げのびた宗盛ではなく、彦島に立て籠つていた武將知盛に移っていた。二人とも過去の実戦から相手の実力のほどはよく承知している。読みに読んで作戦を立てたに違いない。その焦点が潮流だった。

関門海峡の流れは早い。兵船とて当時は小舟、激流に流される。潮流をどう活用するか、彦島を拠点とする平家にとっては東への潮流に乗って速戦速決が有利。満珠島附近に陣取った源氏にとっては、潮流が逆転するまで辛抱し、西への追い潮に乗って追撃する長期戦が勝利の鍵、双方ともそう読んでいた。

元暦二年(一一八五年)三月二十四日、運

命の一戦が行われた。「玉葉」にある通り午刻、つまり正午頃開戦というのが今日では通説になっている。源氏の船は三千余、平家は千余、少くとも一万人以上の人間が海上にひしめいた訳だ。潮流は始め平家に味方した。知盛苦心の一策、貿易で手に入れた唐船を大將の船のように見せかけ、一族始め屈強の勇士を乗せた小さい兵船をカムフラージュする戦法も成功するかに見えた。然し平家の即決戦法成らず、潮流はやがて逆転し、身内からは裏切者が続出、艦隊編成のトリックも見破られてしまった。逃げ迷い、壇の浦に追いつめられる平家。戦いは僅か四時間、平家は呆気なく滅んで行った。

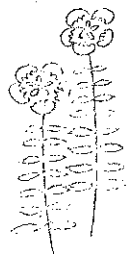
この合戦を再現する下関市の年中行事が数年前まで行われた。五月一日港祭りの「源平舟合戦」一復興の景気づけに終戦後始めたもので、市内の漁師が二百隻ぐらゐの漁船を出し、知名士が乗って海戦絵巻を再現する趣向だったが、経費の関係で無期延期になったという。源平合戦の有様は、古い絵巻物や図絵でしのぶほか無い。然し早瀬の瀬戸の激流だけは今も変わらず、七百八十年前の激闘の絵巻にわれわれを誘ってくれる。港湾造成を手がけ、日宋貿易に乗出すなど限りなく海へのあこがれを持っていた清盛。同じ海の中に沈みゆく一門の最期に、清盛は草葉の蔭で「大望の末路は何と怪しいことよ、人間の運命の何と皮肉なことよ。」と思ったことだろう。

切抜帳から (四三)

平井春嶺

終戦の真相 (二二) めぐる一部軍人の策動(2)

私(元内閣書記官長迫水久常氏以下同じ)が警視庁に参り町村総監に合いますと、どうも昨夜二時頃から宮内省の電話が不通になっているというのです。よく調べて見るとほん



壇の浦の哀史をしのぶには、夕暮から夜にかけて古戦場の岸辺に立ち海を眺めるのが良い。昼間は活気づく下関の漁港や北九州工業地帯の遠望が目を覆う。夕四時頃から下関市の壇浦町海岸をぶらつくとき、狭い早瀬の瀬戸を映んで対岸は門司。一ときゆるやかだった潮がいつの間にか早くなっている。ザザ、ザザ、急流にこぼれる白波が、白い歯をむき出したように夕闇の中に光る。やがて背後の火の山ロープウェイの山頂の灯がつくのを合図のように、停泊中の船団の火が輝き出す。時々潮風に吹かれて流れる汽笛、しみじみとした哀感を味わう。この、目の前の海中に平家一門は沈んでいったのだ。

とうに大事件でして、それまで私が知らなかったのは誠に申訳のない所でございました。陛下が録音を終られてから間もなく、陸軍省に勤務していた三人の中、少佐が近衛師団長、森中将の所に参り、陛下が終戦の御決意を遊ばされたのは、全く側近にあやまられて居られるのであるから、これから側近を除き陛下にお考え直しを願わなければならぬのについて、近衛師団の兵隊を宮中守護の名の下に、宮城内に入れるようにして頂き度いと申しました。森師団長はその不心得を懇々と諭されました所、彼等は森師団長にピストルを発射し、又白刃をふるってこれを殺し、師団長室に於て偽の師団命令を作って近衛師団の全員を宮城内に出動せしめたのであります。そしてこれ等青年将校はその中の一部分を任じ、先ず折柄退出しようとした下村情報局総裁以下を監禁し、宮内省中を家探しをして、陛下の録音盤を奪取して翌日の放送を不可能ならしめようとしていたのです。流石に彼等も陛下の御居間の方はおかしませんでした。宮内大臣も内大臣も皆一室に監禁されたのであります。

この事件は当時の東部軍司令官田中静彦大將が唯一人、宮中に入ってよく事態を説明し午前六時頃には兵隊は凡て退去し事なきを得たのであります。田中大將はこの責任を負って直後に自刃されました。この将校連はその後放送局に現われて放送局を占拠し、陛下の

放送を妨害しようとしたがそれも出来ず、遂に二重橋前にて打撃って、割腹自殺しました。誤れる正義とは申せ、彼等は彼等なりに真剣であったのであります。

私は警視庁に於て阿南陸軍大臣が十五日午前四時頃、自刃されたことを知りました。お部屋の壁には「一死萬罪を謝し奉る」と書いたものを貼り「大君の深きめぐみに浴みし身は、言い残すべき片言もなし」という辞世を残されました。

私はここに少しく阿南大將のことを申し上げなければなりません。丁度十四日午後十一時過ぎでありました。終戦に関する詔勅の公布に関する一切の手続を終り、各閣僚は夫々退出された後、私は、総理大臣室に於て、鈴木総理と相対座して居りました。大事を終った後の一時でありましたが、ただわけもなく涙が流れて仕方がありませんでした。そのとき戸口を叩いて、阿南大將が入って来られました。軍刀をつり、帽子を小脇にかかえて入って来られ、総理に対して直立不動の姿勢にて「終戦の議が起りました以来、私は色々申し上げましたが、この事は総理に御迷惑をおかけしたかと思ひ、ここに謹んでお詫申し上げます。私の真意は一つにただ、国体を護持せんとするに於てありまして、敢えて他意あるものでは御座りません。この点は何卒御諒解下さいませう。」と涙と共に申されました。総理はうなずき乍ら、阿南大將の側近く寄り、手を

肩におき、「そのことはよく判って居ります。しかし、阿南さん、日本の皇室は必ず御安泰ですよ。何となれば、今上陛下は、春と秋の御祖先の御祭りを必ず御自身で熱心になさって居られますから」といわれました。阿南さんは両頬に涙を伝わし乍ら、「私もそう信じます」と申されて、敬礼をして静かに退出されました。私は玄關までお見送りをして、総理室に帰って参りますと、総理は、「阿南君は、暇乞いに来たのだね」と言われました。このときの光景は、私の終生忘れられない所として、殊に総理のお言葉は、誠に深遠な意味があると思ひます。伝統の原理を体得した方でないとならない言葉であり、又意味の判らない言葉ではないでしょう。

阿南大將は前にも申し上げた通り、終始終戦には反対されました。併し私は、大將はほんとうに苦しい腹芸をされたのだと思ひます。阿南さんは侍従武官として陛下に直接お仕えし、陛下の御心はよく知って居られたのであります。心は終戦の外なしと考えて居られたのに相違御座りません。何故あのように終戦に反対されたかと申しますと、私は次のように考えます。

当時の陸軍の状況から申しますと、若し阿南さんが終戦に賛成されたら、必ず部下に殺されたら内閣としては、陸軍大臣を補充しなければなりません。当時の陸軍大臣は陸軍現役の大・中將ということになって居りましたの

残 暑 御 見 舞

<p>仲川秀邦 東京都中野区中央一丁目 三二ノ六 電話(361)七七四〇番 郵便番号 164</p>	<p>馬瀬槍水 大阪府羽曳野市高鷲三丁目 五ノ一〇 電話(54)四八四四番 郵便番号 583</p>	<p>矢倉ポール ロサンゼルス</p>
--	--	-------------------------

で、その補充について軍が承諾しない限り出来ないのであります。若し陸軍大臣を補充出来なければ、鈴木内閣は総辞職する外ありません。あの場合、鈴木内閣が総辞職したらどうなりますか、終戦は出来なかったでしょう。阿南さんはこのことを知って命を保って、鈴木内閣をして終戦を実現させるために、あの腹芸をされたのです。若し心から終戦反対なら辞職されて了えばやはり鈴木内閣はつぶれて終戦は出来なかったでしょう。私は心から阿南さんを尊敬します。東京多摩には大將の墓地がありますが、お参りする毎に私は抱きついてお礼を申し上げ度い気が致します。終戦の御詔勅は予定の通り十五日正午国民総号位の中に放送されました。陛下のお声をきき乍ら関係一同涙を新たに致しました。鈴木内閣はその直後辞表を陛下に奉呈しました。(以下次号)

(次号は終戦内閣の総理鈴木貞太郎の人格)

義経には過ぎた静

村井 康彦



学生時代京都で暫く下宿していた家に可愛いの女の児が居た。小学校の一年か二年生で、

母親から琴の稽古を受けていて、琴を爪弾きながら歌うのを二階の私は聞くともなしに聞いていた。『よしのやまア、みねのしらゆきふみわけてエ、いりり』、『ほれたまた違うたあかんえ、もう一べん弾きおし』。稽古はいつもこうでストップ。お蔭で私はそのあと「入りにし人の跡ぞ恋しき」の節廻しを今以て知らない。静御前が私にとって懐しい存在なのは、そういう若き日の思出で繋がるのかも知れない。しかしそうでなくても大体静にはイヤな点は何一つないではないか。夫思いで凛々しくて美人で、男冥利につきるとはこういう女性を妻に持った場合を云う。静は義経には過ぎた女であった。尤も静愛慕の念は同じように不幸だった義経への同情と重なり合うことによって、いよまさるのではあるが。『義経記』によれば、京都神泉苑での祈雨の法要に後白河院に召されて舞った白拍子の静を、これに従っていた義経が見染めて堀川の館(やかた)に召したものである。寿永四年、一の谷の戦いに武名を挙げた義経が一旦帰洛し、後白河院より左衛門少尉、検非違使に任ぜられた頃から院と義経の密接な関係が生じ、静は院の仲介によって義経の愛人となった。然し義経は仲々の発展家で、兄頼朝がきめた正妻(河越重頼の娘)がその項上落して来たのは己むを得ないとしても、『義経記』などによると十二人の北の方があり、その外にも艶聞が少なくない。静はそ

した数ある妻妾の一人で、義経に対する静の愛情が始めから細やかであったのではない。けれども翌文治元年十月、頼朝の命を受けた土佐房昌俊に堀川邸を襲われた際、沈着に対処して義経を危機から救ったのが静であったのを見ると、二人は同棲していたようで、その翌月十二人の妻妾を連れて都を落ちた義経が、尼ヶ崎の大物の浦で遭難した落吉野に入った際、一行中に女性静だけだったことを思うと、静が義経の最も愛する側女であったように考えられる。静が夫と悲しい別れを告げたのは慣れそめから一年余、愛情最高潮の時機で、既に静の胎内には義経との愛の結晶が芽ばえつゝあった。だからこそ相手鎌倉殿であれ、二人の幸福を無惨にも切り裂いた張本人ならば、静には胸中にたぎる憤りと悲しみをぶつけざるを得ない。捕われの身となつて鎌倉へ送られた静は、しづやしの、しづの小田巻線返し昔を今にす由もかなと、女として精一杯の抗議で、帰らぬ仕合せに泣く静の心中がいたわしい。貞女とはそういうもので、まげて許して上げて下さいとなどためた北の政所(まんどころ)政子にケチをつける心算は毛頭ないが、再三固辞する静を鶴ヶ岡社頭で無理に歌舞させたのが外ならぬ政子その人であった。頼朝をなだめたのは当然の事である。静はやがて出産した。然しそれは生かしては置けぬ男児であった。傷心の静は母と共に鎌倉を去って京都へ帰った。それから数年経った文治五年、奥州平泉の藤原氏を頼って帰って来た義経は、藤原泰衡の裏切りによって自刃する。義経の追憶に生きていた静の悲しみはどんなであったらうか。静は義経には過ぎた女性であった。

祝京絃創刊十五周年(四)

やりましたね 平井 春嶺

植村さん。とうとうやりましたね。あなた意志の強さ、心臓の強さ、不倒不屈の精神に唯々敬服するばかりです。十五年の永きに亘り一と月も欠かさず発行する事の如何に至難なことか。一八〇号も続けて出版することの如何にむづかしいわさか。莫水さん、とうとうやりましたね。その間には順風ばかりではありませんでした。今思い出して涙の出るようなこと、憤りにワナワナふるえること、何のためにこんな云われねばならないのさかと思われること等々々。でも植村さん、あなたはとうとうやりましたね。これみな唯々一途に琵琶を愛するがゆえでしょう。流派にこだわらず琵琶を愛する。琵琶を尊敬する、そのゆえでしょう。あなたのその心が「京絃」に、はつきり表われ、それが読む人の心に訴えるから「京絃」は植村さんと読者をつないで、十五年を続けることが出来たのでしよう。莫水さん、これを契機に更に新しいフアイトを燃やして、二十年、三十年を続けて下さい。植村さん、とうとうやりましたね、と私がその時云うように。(藤摩琵琶四明会員・京都琵琶協会員)

梅原 旭 壽

月日に関守なしとよく云われます。植村莫水さんから、琵琶楽の衰微を歎いてその発展復興策の一助に機関紙発行の話があったのは、戦後の混乱期が一応終って漸く人心が安定しかけた昭和二十九年頃で、当時若かった私達は双手を挙げて賛成し、蔭ながら一臂の助力を約束したのですが、つい毎日の雑用に追われて等閑(なをざり)になり、とうとう植村さん一人に委せきりの状態が今日まで続き、願みて慚愧の念にかられています。以来植村さんは殆ど独力で毎号素晴らしい記事満載の「京絃」刊行を続けて一回の遅刊欠刊もなく早くも十五年が経ち茲に才一八〇号を出されるに至りました。

十五周年に寄せて

木村 維水

昭和十三年を境として三十数年、京都琵琶界の才一線から離れていた私は、昭和四十年正月、以前共に京都琵琶界の一角に活躍した絃好会の盟主であり現在京都琵琶協会の会長である伊吹正陽氏より、同氏邸に於て催される同協会の新年茶話会にお誘いを受け、実に数十年振りに同好の集いに列し、昔に交らぬ琵琶人の持つ人格の崇高さに接し、而も和氣霽靄全く隔意なき交友の様に感じ直ちに入会をお願ひしたところ、皆様より歓迎を受けて許され今日に及びました。其席上、協会は毎月一回茶話会を開き、その日取り等は「京絃」誌上で発表される由を聞き、始めて京都に「京絃」と云う琵琶機関誌があり既に十年、主幹植村莫水氏の血の浸む努力によって発行を続けられている事を知ったのであります。

私は二月号を待ち詫びました。一月末に、一月号と共に入手致しました私は、取るものも取りあえず開封して貪る如く読み耽ったのでした。そして私は感に堪えぬ想いをしたのを覚えて居ります。茲に「京絃」は創刊十五周年を迎えられる。実に此の至難な事業に長年月、独力を以て成し続けられた主幹植村莫水氏の敢闘精神に頭が下ると共に、現下時流に押されて衰勢にある琵琶界に「京絃」と共に斯界の復興に向、當々精力を続けられる先輩を有することに誇りを感じ、絶大なる敬意を表するものであり

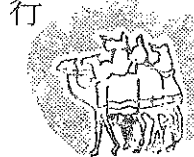
数十年前来交際を願っている植村さんはその性清廉潔白、琵琶を愛し只一筋に琵琶楽の発展と「京絃」の内容充実を心血を注ぎ、他紙に見るような広告収入を講じようともせず、齒の浮くような美辞麗句も使わず、時には痛くもない腹をさぐられたり、或は根も葉もない蔭口をたたかれるなど物心両面に少なからぬ犠牲を払われつゝ、目的達成のための努力、執念、忍耐に対して深く敬意を表すると共に、私達琵琶人は満腔の謝意を捧げねばならぬと存じます。どうか此上とも充分御自重下さって、われらの「京絃」が今後二十年も三十年も続くよう心から祈り上げて、創刊十五周年をお祝い申し上げます。(大阪中央部旭会・京都琵琶協会々員)

私は京絃十五周年のお祝詞を申し上げる前に、先づ先輩のお心意気、ほんとうに有がとうとお礼を申し上げます。(一水会京都支部・京都琵琶協会)

矢倉 ポール

前略毎月「京絃」をお送り下さいまして有難く感謝して居ります。私も東京までは一年に何回となく出張して居りますが、仕事の都合で京都迄訪問出来ず、植村先生をはじめ皆様に失礼して本当に申し訳なく思っています。先月送って頂いた「京絃」を見ますと本月を以て創刊十五周年をお迎えになるとの事、心から御祝申上げると同時に将来の御発展を遠い米国からお祈り申上げます。(後略)

(在ロサンゼルス・琵琶愛好家)



京都琵琶協会の避暑一泊演奏旅行

うだるような盛夏の八月二日(土)、京都琵琶協会では二三の事故者を除き一行十四人、午前十時三台の車を連れられて行程約一時間半、京滋の仙境比良連峰の中腹にある旅館比良山荘に納涼一泊演奏会を催した。

は、風光明媚と云えば人聞きが良いいけれども、実は夏の蒸し暑さと冬の底冷えが名物で、時々たまに浴して二三日の滞在で離京する観光客には想像もつかぬ京都人の苦難であるが、この苦しみから免れて同志の懇親をも兼ねた今回の企画が実現した次第である。比良山荘は鄙びた浮村そのもののような旅館で真夏とは思えぬ涼しさ、昼前到着の一行は先づ前を流れる水のように冷たい清流で手拭を絞って汗を拭き、さっぱりした浴衣に着替えて昼食をとり、ゆっくりくつろいだあと、琵琶を手にする者、麻雀に興ずる者、谿谷にかゝった朱塗りの橋を通過して美景の附近を散策する者、或は近くの安曇川上流に釣竿を垂れて太公望を築しむ者など気楽な自由行動をとって入浴、夕食には野趣豊かな山菜料理や鮎の塩焼、鯉の蒲焼、鯉の洗いなどに舌鼓を打った後、涼風に吹かれながら各自一曲の演奏を楽しんだが、数組の同宿の人達も座敷や庭で静かに古典芸能の妙味に浸っていた。十二時一同枕を並べて就寝。翌三日は昨日に引続いた曇り空で、朝は驚、屋はひぐらしの鳴き声を聞きながら、食ったり寝たり黙べったり、或は撥を手にしたり散歩したり、文字通り骨休めの涼しい一日を過ごしたが、その間数人の篤志は鬱蒼たる森に囲まれた近くの村の氏神さまに詣で、拜殿で奉納演奏をして技能上達を併願した。斯くて午後六時、最後の夕食を共にしたあと、宿の人々に見送られながら幾多の曲折に

Table with 2 columns: 告予会奏演 and 告予会奏演. Contains performance dates and locations like 十月五日(日)正午開演 and 山一証券ホール.

本号からしばらく之れを連載する。御参考の一助ともなれば幸甚。(係)

寸言(1)

小野小町 小野篁(たかむら)の孫、父は出羽郡司小野良真だといわれている。六歌仙の一人で三十六歌仙にも加わっているが、何よりも「小町」と云えば美人の代名詞にまでなった佳人。後世癩を病み逆に醜女として生涯を閉じた運命の象徴のような女性。遺跡が全国に散らばっているのは恋人の多かつたせいでもあろうか。

武絃会第七十

二回研修会 七月六日午後一時より小酷暑を克服して左の通り熱演し六時閉会した。 榎狩ー渡部喜山 本能寺ー吳究静軒 坂崎出羽守ー加藤錦陽 静ー加藤喜水 父・乃木将軍ー伊藤馨水 榎狩ー坂本錦道 白虎隊ー杉山松正 龍の口ー中村修水 橋弁慶ー土田昇龍 吹雪の敵ー高杉洲靖 城山ー大村鼓城 彰義隊ー清水源城 相模湖ー菊地甘水(敬称略)

一水会大阪支部 七月十三日長梅雨も明研修演奏会 けた猛暑の日曜日大阪府立労働会館ホールに於て才二十三回梅組の研修会を開催。支部員の外旧知のファン十数名

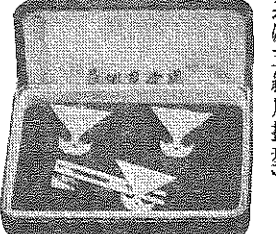
を招き左記熱演を展開したが此催しは日頃の研鑽発表が狙いで梅雨明けの酷暑と気魄の闘い物凄く奏者の流汗が聴衆席に飛び散る場面もあり一同に大きな刺激を与えたのがとても印象的であった。 金剛石ー木村蓮水 榎狩ー松岡槍月 白虎隊ー佐々木寒水 川中島ー番匠清水 恩讐の彼方へー木村蓮水 淀君ー田中敷水 茨木ー藤原英水 花吹雪ー神戸支部長蔵本司水 舟弁慶ー大阪支部長馬瀬槍水 鉢の木ー小川吟水(敬称略)

京都琵琶協会の 祇園祭奉納演奏会 東京の神田祭、大阪の天神祭と共に日本三大祭と云われる京都祇園祭あとの祭りが七月二十三日行なわれ、午後六時から祇園八坂神社に於て京都琵琶協会

製造元 東京工芸製品協会 電話 (82) 六六六二番 振替 東京二〇〇四一番

琵琶撥型カフス釦、ネクタイ止、バックル

琵琶人用カフス釦、ネクタイ止、バックルの新製品が出来ました。御希望の方は左記取扱者に御申込み下さい。(写真は薩摩系、筑前系は五絃用撥型)



- ①カフス釦・ネクタイ止セット 撥面に雅号金文字彫刻入 サック付 一組 金千六百元
②カフス釦・ネクタイ止セット 彫刻なし 一組 金千参百元
③ネクタイ止 雅号金文字彫刻入ケース付 一個 金 六百元
④ネクタイ止 彫刻なし ケース付 一個 金 五百円
⑤バックル 彫刻なし ケース付 一個 金 六百元

販売期限 本年九月末日限 雅号彫刻約二十日間 (送料実費御負担の事、但前金御申込み限り製造元負担) 近時郵便のストで発送品が大分延着している様子です。 万一未着の場合は御一報下さい。 東京都北区田端町一五三